

<研究ノート>

中山間地域の担い手不在問題

— ボランティア・大学生の可能性 —

藤 本 穰 彦

田 中 恭 子

平 石 純 一

はじめに

1. 問題の所在—限界集落化と担い手不在問題の発生
2. 誰が担い手になりうるのか
 - (1) 専門家—集落支援員、地域おこし協力隊、地域マネージャー
 - (2) ボランティア—森林ボランティアを中心に
3. 大学生、地域と出会う—フレッシュマンセミナー（フィールド編）
 - (1) 植樹祭—森づくりは海づくり in 浜田
 - (2) フレッシュマンセミナーの弥栄フィールドワーク
 - (3) 暮らしと環境にかんする学生のレポートより

むすびにかえて

はじめに

本稿ではまず、過疎・高齢化が進む中山間地域の現状を、限界集落論を導きとして、社会的共同生活の維持困難や自然資源管理の担い手問題に注目して描きだす。そのうえで、「誰が担い手となりうるのか」の問いにこたえるべく、①専門家、②ボランティアの役割をそれぞれ考える。とりわけ②について、森林ボランティアと大学生の事例検討が本稿の中心となる。

1. 問題の所在—限界集落化と担い手不在問題の発生

現在、中山間地域¹⁾の過疎・高齢化が進行している。1990～2000年の人口増減率をみると、平地農業地域では3.2%増なのに対し、中山間地域では4.1%減少している（橋詰登 2005:45）。また、老年人口率をみると、平地農業地域20.6%に対し、中山間地域では25.1%と高い（橋詰登 2005:45）。なお、2005年には、中山間地域の老年人口率は28.2%に急騰している（農林水産省編 2009:108）。中山間地域の現状と課題をより詳しく描き出すために、限界集落論を導きとして考えてみよう。

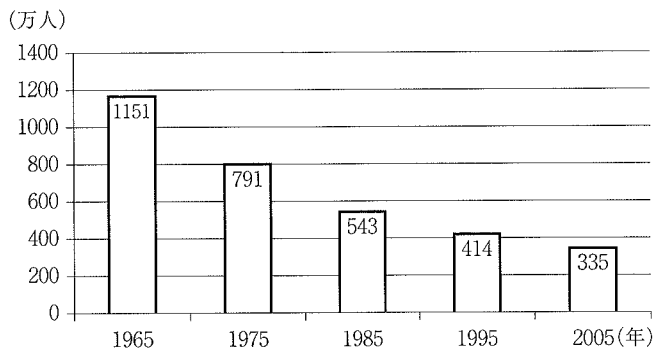
大野晃によれば、限界集落とは、「65歳以上の高齢者が集落人口の50%を越え、独居老

人世帯が増加し、このため共同活動の機能が低下し、社会的共同生活の維持が困難な状態にある集落」と定義される（大野晃 2005:22-23）。社会的共同生活とは、冠婚葬祭や役職をはじめ、地域や集落の様々な行事や農作業、そして、日常の生活のなかでの支えあいを指す。元来、中山間地域では、地域資源を、集落で共同管理することで、生命と生活を維持してきた。春には皆で山菜を採り、夏には皆で草を刈り、秋には皆で収穫を祝い、冬には皆で雪かきをする。力を合わせ、支えあい生きているのである。したがって、中山間地域において社会的共同生活の維持が困難になるということは、その土地で生きることの困難と直接つながってしまう。

中山間地域の担い手問題を考えるにあたり、まず農林業の就業人口の推移をみてみよう。

図1は、農業就業人口の推移を示したものである。1965年～2005年のあいだに、農業就業人口は1,151万人から335万人に激減した。そのうち、195万人が65歳以上の高齢者であり、農業従事者のうち65歳以上が半数以上を占めている（農林水産省統計部編 2007）。

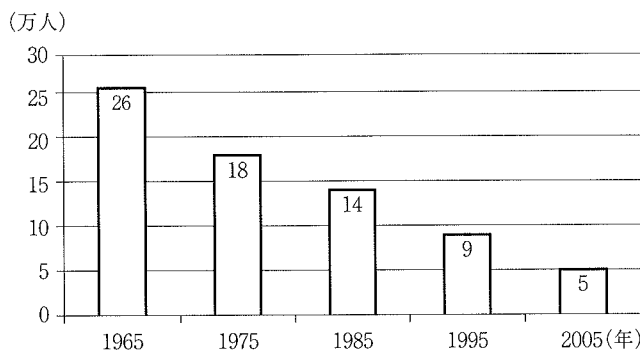
図1 農業就業人口の推移



出典：農林水産省統計部編2007、農林水産省 a をもとに筆者ら作成

図2は、林業就業人口の推移を示したものである。1965年から2005年にかけて、林業就業人口数が26万人から5万人へと大きく減少している。うち26%が65歳以上である（農林水産省統計部編 2007）。

図2 林業就業人口数の推移



出典：農林水産省統計部編2007、農林水産省 a をもとに筆者ら作成

さらに、集落機能の維持状況について、人口減少率別と世帯当たり平均人員別に調査されている。人口減少率別では、50%以上減少の集落で、35.8%が機能維持困難、23.1%が機能低下と回答しており、機能低下・維持困難をあわせると、半数以上の58.9%となる。また、世帯当たり平均人員別では、1人世帯の32.5%、2人以下世帯の17.5%が集落維持困難と回答している。3人以上の世帯では、維持困難の回答は5%以下で推移していることから、2人世帯になると一気に不安感が増し、集落活動への参加に消極的な気持ちが芽生え始めることがうかがえる（農林水産省編 2009:112）。このように、集落の小規模化、世帯の独居化が、個々人に与える心理的影響も大きい。社会的共同性の維持、集落機能の維持という喫緊の課題を、誰が担えるのか、即効的な対処が求められている²⁾。

2. 誰が担い手になりうるのか

(1) 専門家－集落支援員、地域おこし協力隊、地域マネージャー

集落機能の維持や下支えという課題に対して、新たな職業ジャンルを確立して、「専門家」があたる方法が模索されている³⁾。その代表例として、集落支援員と地域おこし協力隊がある（表1、表2）。

過疎問題懇談会（座長：宮口侗旭早稲田大学教授）がまとめた「過疎地域等の集落対策についての提言」（2008年4月24日）において、集落支援員の設置が提言された。「提言」を受けるかたちで、2008年8月1日、「過疎地域等における集落対策の推進について」の総務省通知が、各都道府県の地域振興・過疎対策担当部長宛てになされた。

集落支援員は、①対象は集落、②市町村（職員）との連携、③地域内人材の登用に特徴があり、活動内容としては、①集落・地域課題の把握、②集落・住民の下支え、③住民と住民、住民と市町村とのつなぎ役の3点に集約される。2008年度は、専任の集落支援員が199人、自治会長などとの兼務では約2000人が活動した⁴⁾（総務省a）。

地域おこし協力隊は、2008年12月19日発表の「地域力創造プラン（鳩山プラン）－自然との『共生』を核として」の第2項目、「地域連携による『自然との共生』の推進」のなかで言及されている。「協力隊員の定住・定着も視野に、働き手を都市から農山漁村へ移住させ、地域への貢献や、地方での生活を望む都市住民（若者等）のニーズに応えるとともに、人口減少・高齢化に悩む地方（受け入れ側）を活性化」することが取組内容とされている。その後、2009年3月31日、「『地域おこし協力隊』の推進について（地域おこし協力隊推進要綱）」の総務事務次官通知が、各都道府県知事、各指定都市市長殿宛てになされている。

地域おこし協力隊は、①対象は地域社会（行政単位を中心に）、②住民だけでなく自然資源や地域資源についても、③地域外人材の登用（定住・定着をはかるため）に特徴があり、活動内容としては、①地域資源の発掘と活用、②活性化事業の実施（とくに農林漁業）、③住民の下支えの3点に集約される。2009年度に300人程度、3年後に毎年3000人規模を目指すとされている。なお「適性と能力に応じ」、集落支援員と地域おこし協力隊の兼任が認められている（総務省c）。

次に、鳥根県と鳥取県ほかが採用している地域マネージャーである（表3）⁵⁾。鳥根県の地域マネージャーは、①集落を超えた範囲で、②新たな地域運営の仕組みづくりを目的としていることが特徴であり、活動内容としては、集落支援員と地域おこし協力隊を総合し

表1 総務省、集落支援員と地域おこし協力隊の比較

事業名	集落支援員	地域おこし協力隊
事業の目的	①集落の課題を「自らの地域」の課題としてとらえられるようにする。 [課題の把握] ②集落に対して十分な目配りを行う。 [下支え] ③住民と市町村の強力なパートナーシップを形成して取り組む。[つなぎ]	人口減少や高齢化等の進行が著しい地方において、地域外の人材を積極的に誘致し、その定住・定着を図る。 [地域外人材]
事業内容	①市町村職員とも連携し、集落への「目配り」として、集落の巡回、状況把握等を行う。 ②市町村と協力し、住民とともに、集落点検を実施する。 ③住民と住民、住民と市町村との間で集落の現状、課題、あるべき姿等についての話し合いの促進する。集落支援員がアドバイザー、コーディネーターとして参画、支援する。	農林漁業の応援、水源保全・監視活動、住民の生活支援などの活動に従事してもらいながら、当該地域への定住・定着を図る。
募集人材	行政経験者、農業委員など農業関係業務の経験者、NPO関係者など地域の実情に詳しい人材を活用（地域の実情に応じ、当該市町村外の人材活用も利用） [地域内人材]	生活の拠点を3大都市圏をはじめとする都市地域等から過疎、山村、離島、半島等の地域に移し、住民票を移動させたもの ※同一市町村内において移動したものと及び委嘱を受ける前に既に当該地域に定住・定着しているものは不可
活動期間	1年	1年以上3年以下
賃金・勤務等	専任の集落支援員 1人当たり 220万円/年 自治会長など他の業務との兼任 1人当たり 40万円/年	1人当たり約350万円/年 （報償費等は約200万円/年）

出典：総務省HPをもとに筆者ら作成

(<http://www.soumu.go.jp/>, 2010年2月1日アクセス)

た内容が求められるものになっている。また、地域マネージャーの業務には、「行政の公平性・公益性・公共性の原則に基づかないものもしばしばある。行政職員の指揮命令系統とは異なる位置にあり、行政ではできない仕事を担う点を重視すべき」であるとの指摘もある（藤山浩編 2009:12）。

「専門家」はどのように地域を支えているのか、毎日の活動は大変興味深い。地域の課題や現状によっても活動内容や必要とされる人材像が変わってくる。機会を改めて検討したい。

表2 美郷町、集落支援員と地域おこし協力隊の比較

事業名	美郷町集落支援員	美郷町地域おこし協力隊員
事業の目的	集落対策の一環として、町内の各地域において、地域の現状に目配りし、地域の課題を住民自らの課題ととらえることで住民、地域・関係団体、役場関係係などが連携した取り組みを進める。 (地域のアドバイザーやコーディネーター役)	高齢化及び急激な少子化により、地域力が低下し将来において地域の存続すら危惧されており、地域が持続していくには、その地域で生活を共にし、地域の活動に参加する、担い手となる人材が必要になるため。(地域力の維持・強化を図る)
事業内容	①地域の状況の調査・点検 ②地域の課題の把握、抽出 ③地域団体等との協議・話し合いの場づくり ④地域内外での連携・協力体制づくり ⑤地域独自の住民サービス、町等と連携した対策の検討。この他に定期的な連絡会議、研修会等への参加	①農林漁業の応援・従事 ②環境保全活動 ③住民の生活支援 ④地域おこしの提案と実践 ⑤地域活動への参加及び参画 ⑥集落支援員及び連絡自治会等との連携・協力 ⑦その他、目的達成に資する活動。この他に、定期的な連絡会議、研修会等への参加
募集人材	地域の支援、振興活動の経験があり、関心が高い方優先 交通手段（普通自動車免許、自家用車又は、バイク等）があること	①生活の拠点を3大都市圏をはじめとする都市地域等にあるもの（地方都市であっても受付し、審査の結果採用） ②地域内に移住すること ③普通自動車運転免許をもっているもの
活動期間	2年間（平成21年7月1日～平成23年6月30日まで）	2年6ヶ月（平成21年10月1日～平成24年3月31日）
賃金・勤務等	基本給50,000円/月 調査手当200円（1世帯） 交通費3,000円/月 通信連絡費5,000円/月	基本賃金（月額）160,000円 社会保険等 厚生年金 健康保険 雇用保険

出典：美郷町HPをもとに筆者ら作成

(<http://www.town.shimane-misato.lg.jp/index.php>, 2010年2月1日アクセス)

(2) ボランティア—森林ボランティアを中心に

次に、森林ボランティアを事例に、森林と人々とのかかわりについて再考し、市民が森林資源の担い手となる可能性について考えてみよう⁶⁾。というのも、森林資源は誰のものか、森林資源の恩恵を享受するのは誰か、が変容してきているからである。

図3は、国民が森林について期待する働きについて回答数の多いものから順にランキングしたものである。2007年の結果を上位からみると、地球温暖化の防止、災害の防止、水源涵養、環境保全、癒し、生物多様性の保全、教育の場と続く。そして、下位2位に、木材を生産する働き、きのこや山菜などの林産物を生産する働きがランクされる。木材を生産する働きは、1980年には2位/6項目中であったことを考えると、森林に対する国民の

表3 島根県、鳥取県、地域マネージャーの比較

事業名	地域マネージャー（島根県）	地域マネージャー（鳥取県）
事業の目的	プロジェクト地域に指定した市町村への重点的な支援を目的に、多様な主体の参画による、集落を超えた新たな地域運営の仕組みづくりを推進	それぞれの地域の課題解決に資するとともに、他地域のモデルとなる地域資源を活用した住民主体の地域づくりの具体的な提案を募集
事業内容	地域課題・資源の状況把握、住民意見の集約、具体的な取り組みについての企画・調整、地域内外への情報発信	地域への誇り・愛着を共有する住民、地域団体、NPO、企業等の多様な主体が担い手となって、地域の課題解決に向けて、地域にある様々な資源やポテンシャルを活かした「地域づくり」を実践
募集人材	県下に10地区8名を配置。うち、5名を地域内から、3名を公募により決定。	地域団体、NPO法人その他団体で、当該地域において地域づくりに意欲的であり、かつ、中核を担うことが可能な団体等。ふるさと雇用再生特別基金の活用事業であるため、失業者を雇用すること。14団体の応募があり、うち6団体が採用。
実施期間	平成20～21年度 (コミュニティ再生重点プロジェクト事業)	平成21年度～平成24年度(最大) (「地域マネージャー」配置による住民主体の地域づくりモデル事業)
活動期間	最大2年間	最大3年間
賃金・勤務等	上限500万円/年(事業費を含む)	上限600万円/年(事業費を含む)

出典：島根県、鳥取県のHPをもとに筆者ら作成

(<http://www.pref.shimane.lg.jp/>, <http://www.pref.tottori.lg.jp/>, 2010年2月1日アクセス)

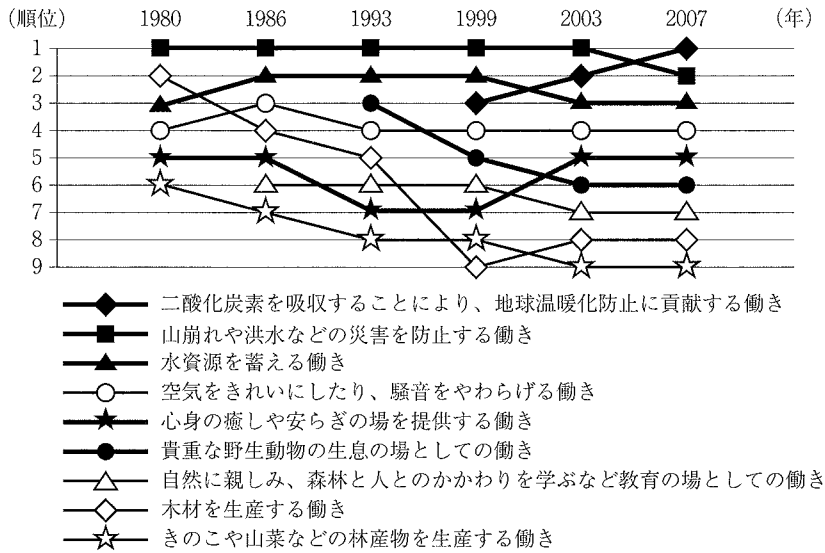
期待の変化がみてとれる。

これまで「森林は所有者のもの」と考えられてきたが、こんにち、農林業従事者の減少と高齢化が著しい(図1、図2参照)。他方、キャンプなどのレクリエーションやセラピーのために、多様な人々が山を利用するようになった。さらに、森林のCO₂吸収力、森林資源のエネルギー利用、水源涵養や国土保全の観点からの見直しもある。伊藤勝久によれば、森林は、「森林所有者だけが恩恵を享受する時代から、国民全体が自然の機能を享受する時代への過渡期」(伊藤勝久 2009a)であるという。ここに、所有者だけでなく様々な人々が参画し、森林資源を共同で維持・管理していく可能性が拓かれる。

図4は、森林ボランティア団体数の推移を示したものである。近年、森林ボランティアは、増加傾向にある。森林ボランティア団体数は、2007年には2,224団体を数える。1997年～2007年の10年間で、団体数が約10倍となっており、関心の高まりがうかがえる。

森林ボランティアの主な活動目的は、里山林等身近な森林の整備・保全、環境教育、森林に関する普及啓発の順に多い(林野庁研究・保全課編 2007:7)。また、里山林等に期待する役割をみると、地域住民が活用できる身近な自然としての役割、子供たちが自然を体験する場としての役割が上位を占める(林野庁編 2007:81)。森林ボランティアの役割

図3 国民が森林に期待する働き

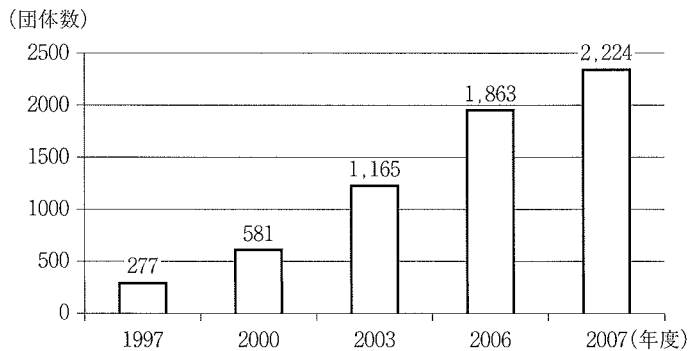


出典：「森林・林業に関する世論調査」(1980年)、「みどりと木に関する世論調査」(1986年)、「森林とみどりに関する世論調査」(1995年)、「森林と生活に関する世論調査」(2007年調査)、以上すべて内閣府。なお、本稿では、農林水産省編 2009:50より再掲。

は、身近な自然の維持管理、自然体験と環境教育、森林整備の重要性の発信に集約されそうである。

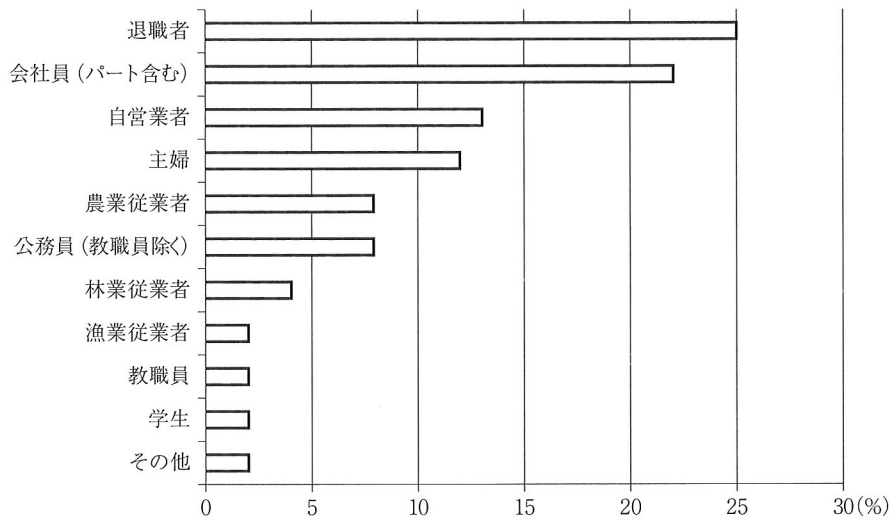
図5は、森林ボランティア団体の会員の主な職種を示したものである。退職者、会社員、自営業者、主婦が多く、学生や教職員は極端に少ない。森林ボランティアについて市民のなかでも、一様の関心があるわけではなく、多様な意識があることがうかがえる。また、2006年調査では、森林ボランティアの80%が50歳以上で占められており、他方、30歳未満を合計しても3%にしかならない(図6)。幅広い世代からの参加が得られているわけでもなさそうである。くわえて、伊藤勝久によれば、「林業従事者の参加が少なく、林業・森林所有者と森林ボランティアの意識の乖離がみられる」(伊藤勝久 2009b)。森林の

図4 森林ボランティア団体数の推移



出典：林野庁研究・保全課編 2007:1、林野庁編 2008:61をもとに筆者ら作成

図5 森林ボランティア団体の会員の主な職種

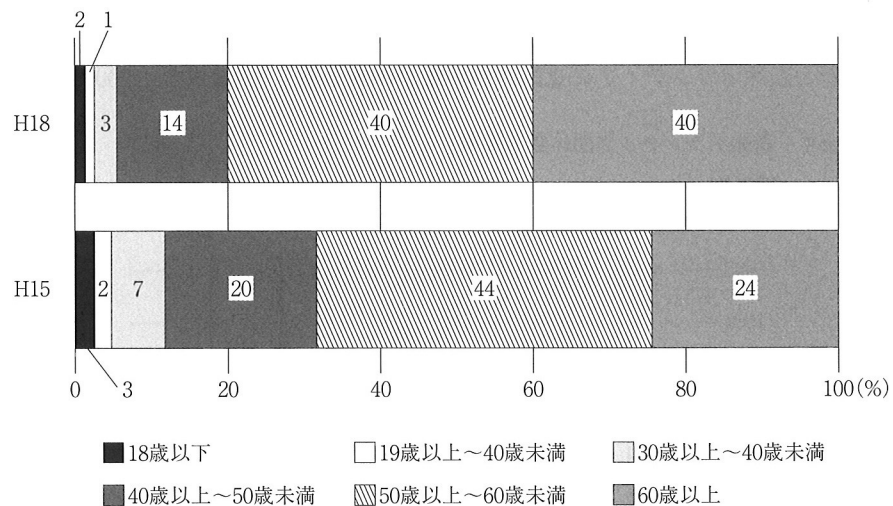


出典：林野庁研究・保全課編 2007: 4 をもとに筆者ら作成

見守りは長期的かつ継続的なもので、かつ、本格的作業には高度な技術や知識を要するなど、森林組合など専門家が担う部分は変わらず大きい。中長期的な維持管理の必要や本格的作業にかかる専門的な技術や知識の有無は、森林ボランティアの限界を端的に示している。

森林ボランティアには、森林管理や自然の重要性を伝え、関心を喚起する役割がある。一方で、継続的にかわりをもつことの困難と専門的知識や技術の修得不足が課題として残った。くわえて、若い世代の参加がほとんどない現状が明らかとなった。ボランティアから

図6 森林ボランティアの年齢構成



出典：林野庁研究・保全課編 2007: 3 をもとに筆者ら作成

はじめ、少しずつ継続的なかわりをもつようになり、技術や知識を習得していくというプロセスを考えれば、若い世代の参加に期待したいところである。

では、集落機能の維持や下支え、森林資源や地域資源の維持管理という課題に対して、若者のボランティア参加はいかにして可能となるのか。これらの課題をどのように伝えることができるのか。次章では、島根県立大学で開講されている「フレッシュマンセミナー」(フィールド編)を事例に考えたい。

3. 大学生、地域と出会う―フレッシュマンセミナー (フィールド編)

島根県立大学では、初年度教育として「フレッシュマンセミナー」を開講しており、1年次生全員を対象に、演習形式を用いた導入教育科目を設置している。われわれの連携意義としては、早い段階で、環境問題や農的生活、集落支援活動への興味・関心を喚起できる点である。また、将来の新たな担い手発掘としても継続的かつ総合的な取り組みが期待される。

他方、大学側の意義は、学生の修業活動や地域貢献活動の一環として活動に参加することで、地域問題と自らの修業の関連づけがより具体的になる点であろう。また、学生の社会問題や地域課題への関心を、現地実習やフィールドワークはいかに育むのか、いかにして社会問題や地域課題と自分自身との具体的な「かかわり」を、個々の学生は築いていくのかといった問題を通じて、大学は今後の地域貢献やカリキュラムの方向性を検討するうえで貴重な視座を獲得できる。以上を背景に、今年度は、2つのフィールドワークが計画、実施された。順に概要を示そう。

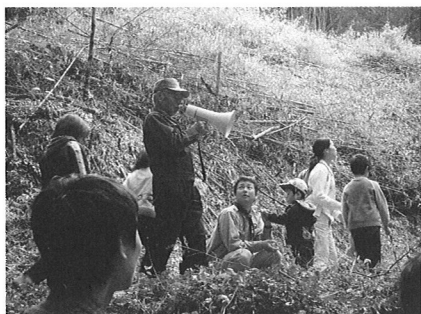
(1) 植樹祭―森づくりは海づくり in 浜田

2009年11月1日、「森づくりは海づくり in 浜田」をテーマに、植樹祭が開催された(浜田市弥栄町)。今回の植樹祭の趣旨は、「漁業・林業関係者、児童・生徒、学生が共同で植林作業に取り組むことで、環境及び森林と海とのつながりを学び、また、地元の名木を見学することや、木工教室を体験することによって木材と触れ合い、関心をもってもらう」というものだ。フレッシュマンセミナーの2つのゼミから22名の学生が、植樹祭に参加した。県大生以外にも、多方面から多くの参加者がおり、総勢160人となった。

「木工教室」から、県大班はスタートした。木工教室では、あらかじめ用意してある中央に穴の開いた丸い木と、細い棒の2つを使ってコマを作成した。ヤスリで削って平らにし、かなづちで叩いて、棒を穴に差し込んでいく。あとは自分の好きな色を塗り、絵を描けば、オリジナルのコマが出来上がる。

木工教室の後は、門田集落にある名木「大かつら」の見学へ向かった。名木のある場所へは、バスが進入できないため、最後は自分の足で歩いた。なかにはサンダルで来ている学生もおり、少し心配であったが事なきを得た。現地到着後、山代忠男さん(門田集落)に、大かつらの歴史を解説して頂く。さすが、何年も前から聳え立つ木だけのことはある。学生の心にも残ったようで、大かつらの壮大さに多くの感動を覚えた、大木をみて自然のすごさを実感した、山道を登りきり大かつらを見た瞬間苦労を忘れて見入ってしまった、神秘的で感動した(参加学生のレポート記述より)、などの言及があった。

大かつら見学後、メインイベントの植栽にむかう。門田集落からバスで20分走った「笠松市民の森」で、植栽はおこなわれた。植栽の時間が近づいてきたころ、雨が降り始めた。



（説明する山代忠男さん）



（大かつら）

雨のなか、カップと軍手をはめ、植栽は決行された。ヘルメットとクワをもち作業開始。

病気のナラを除去した場所に、山ざくらを植える。やり方は、苗の近くの土をクワで耕しながら穴を掘り、そこに山ざくらの苗を植え、土を戻し、足で軽く踏めば完了。どしゃぶりの雨のなか、黙々と山ざくらが植えられていく。数年後、笠松市民の森が、山ざくらで覆いつくされるだろう。



（山ざくらを植栽している様子）



（今回植栽された山ざくら）

（2）フレッシュマンセミナーの弥栄フィールドワーク

2009年11月15日、弥栄フィールドワークが行われた。まず、先日植樹祭がおこなわれた「笠松市民の森」へ。目的地へ向かうバスのなかで、三浦香さん（笠松市民の森巡視員）に、市民の森が利用されてきた経緯や造林の目的、弥栄の山の現状、林業の隆盛などについて詳しくご説明いただいた。造林され、一面針葉樹が生えそろう景色が眼前に続く。紅葉が美しい時期にもかかわらず、山は色濃い緑でいっぱいだ。

われわれはさらに奥へと進む。視界が開けるとそこは、11月1日に植樹祭が行なわれたところだった。風が強く、寒さを感じる。バスから降りるのがためらわれたが、意を決し、

外へと踏み出す。そこでは、植林された山ざくら、ナラ枯れの現場、切って新しい芽が出る萌芽更新の様子、植林したばかりの檜林を見ることができた。同級生が、雨のなか植えた山ざくらを見ながら、「私もやってみたい」と声にした学生もいた。



(説明する三浦香さん)



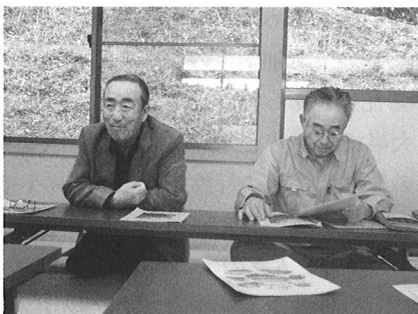
(山頂からふるさと体験村を望む)

強い風のなか、丘を登る。すると視界が拓けた。ここまでは地元の方々もなかなかこないという。ふるさと体験村が見下ろせる絶景ポイントだ。ここは伐採後、植林して3年目の檜が植わっている。15年～20年したら、この景色は見られなくなるそうだ。

笠松市民の森から、小角集落を抜けて門田集落へ到着。次は「農事組合法人 ビゴル門田」でお話をうかがう（組合長の廣瀬康友さんと牛尾英昭さん）。門田では、若者不在、高齢化が顕著だそうだ。「後継者がものすごい来てほしいというのが現実」（牛尾氏）との訴えをきく。現在、全員で門田を住みやすい環境にしようと、皆で知恵を出し合っている。

ひとつの実践として、2009年11月22日には、集落出身者向けのイベント、「第二回 門田で話創哉（はなそうや）」が計画されているという。2008年11月23日におこなわれた第一回では、山口、愛知、大阪、東京や県内（松江、安来、浜田）から16名の出身者が参加し、郷土料理の昼食会や石見神楽の上演がおこなわれたそうだ。

意見交換会ではさらに、門田の歴史、弥栄の農業の現状、集落営農、枝豆オーナー制度や稲刈り体験を通じた都市－農村交流、自然資源を生かした産品開発について、オペレーターの雇用形態や土地の所有権／耕作権についてなど、多様な視点からお話をうかがった。



(左：廣瀬康友さん、右：牛尾英昭さん)



(左から干し竹の子300円、干しわらび300円、干し大根100円)

今回のプログラムはこれで終了と思いきや、「かつ丼が食べたい」と希望する学生、「お風呂に入りたい」と希望する先生の要望にこたえて、再度、ふるさと体験村へ。「2週間ぶりにお米を食べました。普段は麺類やパンばかりで」という学生がいた。なんでも、お米の話がうかがったので、無性に米が食べたくなったらしい。

(3)暮らしと環境にかんする学生のレポートより

フィールド学習を通じて生まれた学生の考えを、①人間と自然の関係の捉えなおし、②未来への想い、故郷への想い、行動につながる可能性、③主体性の発露に整理した。

まず、人間と自然の捉えなおしについて考えてみよう。学生たちにとって、毎日の生活と自然の関係を普段から意識することはあまりないようである。森林伐採の全てがいけない行為ではなく手を加えることで守られる自然があることを知った、森林が豊富なだけで自然豊かであるとは限らない、森と人の共存を感じた（参加学生のレポート記述より）など、改めて、人間と自然の関係を捉えなおした学生のコメントが目立った。

また、森林と人間生活のバランス維持が大切、森林は人間にとって必要不可欠なので必要性を再確認すべき、本来保守すべき立場の人間が環境を破壊しているといずれ危機的状況をまねく（参加学生のレポート記述より）など、人間活動が自然に与えている影響を指摘し、考え直す必要を訴える学生もいた。

次に、未来への想い、故郷への想い、行動につながる可能性について考えてみよう。森林への感謝を実感したので環境について考えたい、自分が植えた桜が立派に成長すれば嬉しい、何十年後の光景をまた見に行きたい、植樹した木がきれいに開花するのを願っている（参加学生のレポート記述より）など感謝を感じ、未来へ想いを馳せた学生のコメントがあった。

このほか、人間生活にとっての森林の重要性は理解していたが、それについて触れる機会はなかった。今回の活動で森林の役割や保全課題について学べてよい体験になった（参加学生のレポート記述より）というように、自分のなかで体験を深く消化した学生もおり、未来志向で行動する可能性が感じられる。

また、地元も弥栄のように森林に囲まれた田舎であるので植樹など森林保全活動をしている。森林には大雨による土砂崩れを防止する機能があったり、きれいな山水の供給源であることからその重要性を改めて実感した（参加学生のレポート記述より）、と自分の出身地に想いを馳せる記述もあり、比較をしながら弥栄を歩いたことがうかがわれる。

最後に、主体性の発露について指摘したい。弥栄にまた訪れたい、晴れの日に訪れて弥栄の将来に対する考えを浮かばせたい、森林を大切にするために私たちが何をすべきかを考えたい、機会があれば今回のような活動に参加したい（参加学生のレポート記述より）など、主体性をもって、参加の想いが語られている記述があった。

しばしば、意識と行動はずれる。「環境問題は大事ですか」と聞けば、多くの人が「はい」と答えるだろう。しかし、「環境問題の解決のために、何か行動していますか」と聞くと、「はい」の回答は極端に少なくなる。意識と行動のあいだをいかに架橋できるか、大きな課題である。第一歩として、自らの足で現場を歩き、人々の生活に触れ、語りかけ、課題や危機を自らの力で深く理解することが肝要だ。フレッシュマンセミナーの「フィールド編」がその一助となればと考えている⁷⁾。

むすびにかえて

どの主体が、どう役割分担してとり組むか、それぞれの主体の可能性と限界を見極めつつ、粘り強く考えていく必要がある。本稿を閉じるにあたり、「島根県立大学里山レンジャーズ」の学生たちが経験した、地域との出会いによる態度変容を記述しつつ、さらなる可能性を示したい。

国土交通省国土計画局2007年国土施策創発調査における、島根県中山間地域研究センター主催の事業「維持・存続が危ぶまれる集落の新たな地域運営と資源活用に関する方策検討調査」の一環で、島根県立大学生による弥栄町における集落支援活動が開始された（島根県中山間地域研究センター編 2008）。その後、大学のサークル活動として、「島根県立大学里山レンジャーズ」を設立、活動を継続中である。生活支援、農作業支援、販売による資源活用（弥栄ショップ）、伝統行事や郷土文化の伝承支援など幅広く支援活動をおこなっている。

当初、中山間地域を活性化する必要から、多様な担い手が必要であるとの方針のもとに、島根県立大学の学生参加が呼びかけられた。初めはアルバイト体制で、全学年に呼びかけ、希望者を登録し、シフト制で現地へ赴き支援活動をしてもらうという体制であった。多くの学生の登録があったが、同様に多くの学生が登録から名前を消していった。しかし、最後まで残った学生の意識は、大きく変化していた。彼らによれば、地域の活動を経験し、地域での生活を知り、人々と会話を重ねるうちに、金銭的欲求以外の各自の動機によって、地域にかかわるようになったという動機の変化を経験したという⁸⁾。学生の地域へ対する態度および関心の持ち方、問題のとらえ方は、ある種のきっかけから生み出され、そこから各自の問題意識を形成する経過が看取された。アルバイトから始まった彼らの動機が、地域との「出会い」に開かれるなかで変容していった過程にヒントがありそうである。未検討のまま置かれた課題とともに、今後詳しく検討したい。

地域や集落維持のイメージは、悲観的な発想からではなく、「強み」の堆積から生まれてくると信じている。ボランティアや学生たちの自由さや遊び、素直な想いと、地域の方々の愛情や愛着との「出会い」に期待をかけて、本稿をいったん閉じることにしたい。

注

- 1) 中山間地域とは、農林水産省統計情報部が定める「農林統計に用いる地域区分」のうち、DID（人口集中地区）の占める面積割合が低い、人口減少率が高い、人口密度が低い、林野率が高い、耕地の傾斜率が高い、高齢化率・耕作放棄率が高いなどの一定条件をみたく中間農業地域と山間農業地域をあわせた地域範囲をさす（橋詰登 2005: 7, 藤山浩 2007:257, および農林水産省HP）。なお中山間地域は、国土面積の72%を占めており、農家戸数、経営耕地面積の4割、農産物の販売金額の3割を占める農業生産地域である（農林水産省編 2009:118）。
- 2) 地域運営を基礎から考え直す新しい仕組みづくりも模索されている（藤山浩 2007）。
- 3) 「農業、地域内での勤務、自給的作業などを組み合わせて1人役の収入が得られるしくみをつくる必要がある」、現時点では、独立した職業になり得ていないという指摘もある。（藤山浩編 2009:13）。
- 4) 島根県では、島根県中山間地域研究センター客員研究員として、4人の集落支援員（里山プランナー）が採用されている（2008年度）。「事業実施にあたり、やる気のある方を公募」とい

- うかたちで人材が募集され、「地域の課題を抽出し、必要な機能・サービスを検討」することを業務内容に活動がおこなわれている（総務省 b）。
- 5) 鳥取県は「ふるさと雇用再生特別基金」活用事業のため、失業者を採用する団体を対象に事業募集しているなどの理由から紹介だけにとどめる。
- 6) 本項の議論は、2009年11月28日に島根県立大学で開催された、第4回環境共生×地域再生セミナー「森林とのかかわりをとりもどす、そのために今どこからはじめることができるのか」（伊藤勝久氏・島根大学生物資源科学部教授）の資料と講義（伊藤勝久 2009a, 伊藤勝久 2009b）、参加者との意見交換に刺激を受けた。また、セミナー報告が2009年12月18日付の山陰中央新報に掲載されているのであわせて参照のこと。
- 7) フィールドワークは、基本的には搾取的な性格が強い行為であり、受け入れる側にとっては迷惑であることが多い（宮本常一・安溪遊地 2008）。社会経験の乏しい学生がおこなう場合には、いっそうリスクをとまなう。長期的なかかわりをもつ際にはとくに、社会人マナートレーニングや心構えを説く時間を十分にもつたうえで、フィールド学習をはじめめる必要がある（河口充勇 2007）。
- 8) 彼らと活動を共にするあいだ、複数の部員からこのような動機の変容があったことを聞いた。

引用・参考文献

- 藤山浩, 「中山間地域から先駆ける持続可能な地域社会への転換—分野・地域・時代を横断するマネジメントネットワークの再生」 島根県立大学地域政策研究グループ編, 『島根の未来を考える—島根地域政策の課題と展望』山陰中央新報社, 2007.
- 藤山浩編, 『社会技術研究開発事業 平成20年度研究開発実施報告書「中山間地域に人々が集う脱温暖化の『郷（さと）』づくり』, 2009.
- http://www.ristex.jp/examin/env/program/pdf/H20_fujiyama_houkokusho.pdf, 2010年2月1日アクセス.
- 橋詰登, 『中山間地域の活性化要件—農業・農村活性化の統計分析』農林統計協会, 2005.
- 伊藤勝久, 「森林利用と林業政策—現状と対策」(2009年11月28日「環境共生×地域再生セミナー」配布資料), 2009a.
- , 「森林の協働管理と都市・農山村の交流」(2009年11月28日「環境共生×地域再生セミナー」配布資料), 2009b.
- 河口充勇, 「フィールドワークの教育効果」『同志社社会学研究』11, 2007:67-79.
- 宮本常一・安溪遊地, 『調査されるという迷惑—フィールドに出る前に読んでおく本』みずのわ出版, 2008.
- 農林水産省, a, 「農林業センサス累年統計書」
<http://www.maff.go.jp/j/tokei/census/afc/past/stats.html>, 2010年2月1日アクセス.
- 農林水産省, b, 「農林水産関係用語集（統計関係用語）」
http://www.maff.go.jp/j/use/tec_term/toukei.html, 2010年2月1日アクセス.
- 農林水産省編, 『平成21年度 食料・農業・農村白書』佐伯印刷, 2009.
- 農林水産省統計部編, 「2005年 農林業センサス」, 2007.
- http://www.maff.go.jp/j/tokei/census/afc/2010/report05_archives.html, 2010年2月1日アクセス.
- 大野晃, 『山村環境社会学序説—現代山村の限界集落化と流域共同管理』農文協, 2005.
- 林野庁編, 『平成19年度 森林・林業白書』農林統計協会, 2007.
- , 『平成20年度 森林・林業白書』農林統計協会, 2008.

林野庁研究・保全課編, 「森づくり活動についてのアンケート集計結果」, 2007.

<http://www.rinya.maff.go.jp/puresu/h16-4gatu/0414b2.pdf>, 2010年2月1日アクセス.

鳥根県中山間地域研究センター編, 『中山間地域から新たな「郷」の時代を創る全国フォーラム―「国土施策創発調査」成果報告会』, 2008.

総務省, a, 「集落支援員の取組み状況(平成20年度)」

http://www.soumu.go.jp/main_content/000019076.pdf, 2010年2月1日アクセス.

——, b, 「集落対策の概要」

http://www.soumu.go.jp/main_content/000043456.pdf, 2010年2月1日アクセス.

——, c, 「地域おこし協力隊推進要綱」

http://www.soumu.go.jp/main_content/000015715.pdf, 2010年2月1日アクセス.

謝辞

フィールド学習を実施するにあたり、浜田市弥栄町の皆さまには多大なご協力をいただいた。なかでも、三浦香さま(笠松市民の森巡視員)、廣瀬康友さま、牛尾英昭さま(以上、農事組合法人 ビゴル門田)、山代忠男さま、山根貢さま(以上、弥栄町門田集落)、栃原英信さま(弥栄町小角集落)、渡辺悟さま(浜田市弥栄支所産業課)、森づくりは海づくり in 浜田実行委員会さまには、直接的なご支援をいただいた。また、弥栄らほ、鳥根県立大学里山レンジャーズ、浜田市弥栄支所、弥栄郷づくり事務所の皆さまには平素よりお世話になっている。そして、林裕明先生、沖村理史先生、金野和弘先生(以上、鳥根県立大学)には、学生を快くフィールドへ送り出していただいた。ここにすべての方のお名前を挙げることは叶わないが、今年度「フレッシュマンセミナーの弥栄フィールドワーク」にご協力いただいたすべての方々に、この場を借りて御礼を申し上げたい。(順不同)

*本稿は、JST-RISTEX研究開発プログラム「中山間地域に人々が集う脱温暖化の『郷づくり』」(研究代表：藤山浩)の成果の一部である。

キーワード：中山間地域 限界集落 担い手不在問題 集落支援員
地域おこし協力隊 地域マネージャー ボランティア 大学生
初年度教育

(FUJIMOTO Tokihiko, TANAKA Yukiko and HIRAISHI Junichi)

